

自然の恵みのおすそわけ：人間関係を築く贈与交換

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: ja 出版者: 静岡大学人文学部社会学科文化人類学コース 公開日: 2018-04-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 介川, 春佳 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10297/00024978 |

自然の恵みのおすそわけ

～人間関係を築く贈与交換～

介川春佳

- 1 はじめに
- 2 私有する山や畑の利用
 - 2.1 山で採れる山菜
 - 2.2 畑で採れる作物
 - 2.3 自然の恵みの調理法―保存食を中心に
- 3 入山のおすそわけとお返し
 - 3.1 入山内での「物々交換」
 - 3.2 由比地区に渡るおすそわけ
- 4 考察
- 5 おわりに

1 はじめに

本章は、山菜や畑で採れる作物といった「自然の恵み」が人びとの間で「贈与」および「交換」の対象となり、それが地区内あるいは地区を越えた人びとの関係の形成にいかに関与しているかを明らかにする。

入山は山と川に恵まれた自然豊かな地域である。入山の住民にとって、山・畑は日常にかかわる場であり、収穫物は重要な食糧源となっている。また、調査を進めていくなかで、所有する山で採れた山菜・自家消費のために畑で育てられた作物をおすそわけしていることがわかった。入山でのおすそわけを分析するために、本章では、文化人類学における贈与をめぐる議論に注目し、考察する。以下の贈与をめぐる議論は、岸上伸啓（2016）の整理に依拠するものである。マルセル・モースは1925（大正14）年に「贈与論」を発表し、そのなかで贈与（交換）こそが人間の多様な社会活動の基盤であると述べている。また、レヴィ・ストロースは1949（昭和24）年に「交換論」を提唱し、交換こそが根源的な社会現象であるとも述べている。1972（昭和47）年にE・サービスは狩猟採集民が日常的に実践している食物のやりとりに着目し、寛容さという価値観を持って他者に対して自主的に食物を分配する狩猟採集民像を提示した。狩猟採集民にとって食物のやりとりは日常的な行為であり、特別な贈り物であるとはみなされていない。モースが「贈与」は与えること・受け取ること・お返しすることという3つの義務から成り立っているという命題を提起している一方で、サービスは狩猟採集民にとって食物やモノの流れは一方向であることがほとんどであり、彼らの行為を「分配（sharing）」と呼んだ。このような狩猟採集民研究において、食物分配と環境適応との関係、食物分配と世界観や思考様式との対応関係、社会関係確認・維持機能、食物分配と生活・場の共有との関係などがこれらの議論では検討されてきており、食物分配は複数の機能・効果を併せ持つ社会基盤となる制度であると岸上は指摘する。そして丸山淳子（2016）は、分配の実践が社会関係の創出と維持を生み出していると述べる。

入山で日常的に行われているおすそわけは住民にとって生活のなかで当たり前のようにな

れる行為であり、特別な行為ではない。なぜ自分たちの家庭で採れたモノあるいは育てたモノを販売せずに「分配」するのか、そして、こうした分配が人びとの生活にもたらすものは何なのだろうか。本章が明らかにするのはこのような問いである。

2 私有する山や畑の利用

本節では入山の山・畑の利用について概観する。入山に暮らす人びとの多くが山や畑を私有地として所有しているが、所有する山や畑の大きさは各家庭によって異なり、必ずしも一続きの土地とは限らない。こうした土地の権利は何百年も前に決まり、現在まで受け継がれてきたものである。石切山和志氏は「昔は離れた土地の管理も今ほど苦ではなかったのではないか」という。当時は現在に比べてスギやヒノキが少なかったために道が通りやすかったことや、多くの人が自分たちの山を管理することに対して「みんなやっているから当たり前」という意識があったことがその理由としてあげられるだろう。とはいえ、こうした土地をみなが積極的に管理しているという訳でもない。山内には倒木が放置されていたり土砂崩れにより崖になっていたりとするなど台風の被害の痕跡が残っているところも散見される。このことから、山や畑の管理はしている人もいればしていない人もいる、というのが入山の資源管理の実情である。では、山や畑をきちんと管理している人びとは、個人の管理下にある山や畑をどのように利用しているのだろうか。以下では入山の山の管理と利用・畑の管理と利用についてそれぞれ見ていきたい。

2.1 山で採れる山菜

山菜とは山野に自生している草本・木本のなかで、芽や花、葉や葉柄、茎や根などが人びとの食用に利用されているものを指す(池谷和信 1999:724)。その一方で、需要の高まりとともに山菜の人工栽培化も現在進んでおり、入山でもフキ、ツクリブキ、タラノメを栽培している家庭が見られた。山菜の収穫時期は3・4・5月がピークである。というのも山菜は芽が一番美味しく食べることができる部位なのだが、6月以降になると成長しすぎてしまい、芽も硬くなってしまうからである。また、収穫する際には、翌年も同じ場所で山菜を収穫することができるように根を残す工夫をしている。

入山では、フキ、ツクリブキ、フキノトウ、タケノコ、タラノメ、セリ、ノビル、ウド、ワラビ、ゼンマイが自生している。ツクリブキというのは真ん中に穴が開いているのが特徴であり、茎の直径が1cm程度の大サイズのフキである。タケノコは時期によって孟宗竹(モウソウチク:入山ではモウソウダケともいう)、破竹・淡竹(ハチク:入山ではハチコ、ハチコウともいう)、真竹(マダケ)と異なる種が自生する。5月末に自生する孟宗竹は新芽および発芽以前にイノシシによって根の部分を食べられてしまうことも多く、イノシシが出没しなくなる時期に採れる破竹を収穫する。その際、鎌を使用して30cm程度のタケノコを収穫する。英君酒造代表取締役を勤める望月裕祐氏の所有する山で採れるタケノコは、毎年英君酒造の商品を扱っている静岡県内外(主に東京都)の小売店・飲食店がタケノコ掘りに来るほど評判が良く、これらの小売店・飲食店ではタケノコを煮物にするなどして、おつまみとして調理して提供しているようだ。なお、タケノコを掘らせてもらったお礼として、タケノコ掘りに使用する鎌をこうした人がプレゼントしてくれることもあるという。

しかしながら、現在入山において自生しているすべての山菜を採集するわけではない。かつてはスイバ、イタドリといった山菜は茎を塩水につけてお菓子として食べられていたが、現在ではあまり採れなくなっている。ゼンマイ、ワラビ、ウドは採集しない人もいるが、それは調

理法がわからなかったり好みの味でなかったりするためである。ノイチゴ、キイチゴなどは自生しているが、現在はほかにも甘くておいしいものが身近に入手できるようになったため採集しなくなった。

一般に山菜は、誰もが平等に利用できる共有の資源であるとされるが（池谷 1999:724）、入山において山菜は個人の資源であり、ほかの人が管理する山で山菜を採ることはタブーとされている。山の境界はスギ、ヒノキを直線的に植えたり谷があったりするなど第三者にもわかるように区切られているところもあれば、境目が明確に示されていないところもある。しかしながら、入山に住む人びとは標識が無くとも誰の山か理解している。過去に入山外に住む人による筍の無断収穫もあって、それ以降は山菜も個人の資源である意識が強まったこともその一因である。ある女性によれば、1980年あたりまではどこの山に入ることも問題なかったが、現在は「他人の山には入らない、他人のモノは採らない」という意識があるという。資源管理が徹底されるようになったことで、曖昧であった境界が意識的に確立し、現在のような山管理が行われている。

2.2 畑で採れる作物

現在入山には商店や青果店が残っておらず、食材の買い出しに行く際には、由比コミュニティバスや車を利用してスーパーや商店の集まる海側の地区に出向く人が多い。また、野菜や調味料、加工品等を販売する移動販売車も毎日来ている。しかし、入山に暮らす人びとのなかには移動販売に対して「衛生面に不安を感じる」「生鮮食品の新鮮さが気にかかる」といった理由から、移動販売の利用に消極的である人もいる。以上のことから、なかなか気軽に買い物に行くことができない入山であるからこそ、食料の大部分を自分たちで賄うために畑を活用する意味は大きい。入山に暮らす人びとの大半は山・畑を所有しており、上述した山の管理と同様に、一続きになっている土地をほかの家庭と分割して管理することがある。その場合、石段になっていたり、根石を置いたりすることで畑の境界を区切っている（写真1）。

畑で作物を育てている入山の人たちだが、JAに出荷するために大量の作物を育てているわけではなく、多くの人が自家消費のために畑を使用している。そのため、各家庭によって育てている作物の種類や量が異なっている。入山の人びとが農作物をJAで売り出すことに消極的な理由は、農産加工品出品者として農薬基準・肥料基準を満たし衛生管理を徹底することが要求されるからである。具体的には、出荷者は毎年JAしみずと株式会社JAしみずサービスが主催する「食の安全研修会」という講座に参加したり、毎回製品として売るためにパッケージングをしたりする必要がある。多くの人びとにとって、これらの要件を満たすのは大変であり、手間や労力がかかるため体力的にも厳しい。さらに、農薬や食品を取り巻く複雑な制度が出荷への消極姿勢に追い討ちをかけている。たとえば、生産面では「農薬取締法」、販売面では「食品衛生法」により、使用可能な農薬が決まっていたり「すべての作物に対しての農薬の残留基準値」が設けられていたりする。2015（平成27）年4月には「食品表示法」が施行され、今後も国内的に食の安全のための監視・検査は厳正なものとなることが予想されるため、入山に暮らす人びとは作物の出荷に対しあまり積極的に関わっていない。

このように、入山に暮らす人びとの多くはさまざまな理由から商業目的の畑づくりを行っていないため、自分の好みで一年中どのような作物でも育てることができる。その際作物によって育てやすい時期とそうでない時期があるため、季節に応じて、ある作物を収穫しては耕して違う作物の種を植える、というふうに効率よく畑を使用する。春にはキヌサヤ、グリーンピース、サヤエンドウ、夏にはナス、キュウリ、トマト、カボチャ、インゲン、エダマメ、秋にはブロッコリー、カリフラワー、ダイコン、ニンジン、キャベツ、ハクサイなどの作物が収穫できる。

ハウレンソウ、コマツナ、ミズナは寒さにも強く一年中育てることができる。多種の作物を育てている住民の多くが、「自家菜園であるからこそ無農薬で安全に育てたい」という思いを抱いている。独特の香りや根の周りには菌によって害虫を遠ざける効果があるマリーゴールドを植えたり葉物野菜は虫除けや栽培のために不織布をかけて小さい温室のようにしたりするなど、工夫して最低限の農薬利用に留めている。

ただ、畑の作物は獣害被害にあうことも多い（詳細は本報告書の和出論文を参照）。聞き取り調査をしているなかで昨年育てていたサツマイモやデコポンがイノシシにすべて掘られて食べられてしまった、という話を耳にした。ほかにもアライグマ、ハクビシン、サル、シカ、ノウサギによる被害がある。このような獣害被害はあるものの、入山の人びとはさまざまな工夫を凝らしながら自家菜園で農作物を育てているのである。



写真1 鈴木洋江氏宅の畑の境界（介川撮影）

2.3 自然の恵みの調理法—保存食を中心に

山で採れた山菜、畑で採れた作物はさまざまな方法で調理、保存される。山菜であれば春先しか採ることができないものも多いため、下拵えをしたうえで採取した山菜や野菜を冷凍保存・乾燥・加工することで長期間保存できるようにし、必要に応じてこれらの食材を料理に使っている⁷。

入山に住む鈴木政光氏・洋江氏の家庭では、多くの山で採れた山菜、畑で採れた作物がタッパーや袋に詰めて保存されていた。ソラマメ、エンドウマメの一種であるツタンカーメンは収穫された状態、フキ、タケノコは下拵えを済ませた状態で保存されていた。また、フキを醤油等で味付けしたキャラブキは甘い味付けと塩分を多く含む味付けの2種類があり、調理・保存方法は各家庭によって異なっている。

各家庭によって「家の味」が存在する一方で、食と健康の関係を考えた活動が由比地区全体で取り組まれている。食生活の改善や健康づくりといった健康保持増進のために全国的に活動する一般財団法人日本食生活協会の食生活改善推進協議会由比地区支部（通称ウグイス会）に所属する芦澤操代氏は、現在「いきいきお料理教室」という講座を開き、地元由比の食を守るために活動している。芦澤氏は「かつて盛んであった漁業・農業は力仕事であるため、塩分・砂糖を摂取することが重視されていた。しかし現代においては生活習慣病・脳に関する病気を予防するために工夫をしていく必要がある。いきいきお料理教室では、低カロリー、砂糖少なめ、エネルギーを過剰摂取しないような素材の味を生かした料理講座をしている」という。例をあげると、フキは醤油だけで煮る「キャラブキ」が長期間保存に適しているが、ただこの料

⁷山菜の調理法に関しては、資料編を参照。

理は塩分が高い。そのため出汁、醤油、みりんを使用し薄味で仕上げることで、食をめぐる近年の傾向にのっとった工夫をしているという。こうして調理されたキャラブキは冷凍保存され、後に解凍されて食卓に上るのである。このように伝統・古来の味を残しつつも、現代の生活に合わせて調理を工夫していくことは今後より重要になっていくだろう。

以上のように、入山で暮らす人びとは山や畑から「自然の恵み」を収穫している。そして、山で採れる山菜・畑で採れる作物はときに加工され家庭での長期保存を可能とするが、人びとは自家消費しきれない分をおすそわけすることがある。地元の人たちはそうしたおすそわけを「物々交換」と呼び、ごく日常的に行っている。次節では入山で行われているおすそわけと、それに対するお返しである「物々交換」について記述する。

3 入山のおすそわけとお返し

入山に暮らす人びとのなかにはおすそわけのことを「物々交換」と呼ぶ人もいる。安溪(2000)によると、一般に物々交換は貨幣を使わずに物と物を直接交換する交易の形式であり、値踏みと駆け引きが伴うことが多いと定義されている。入山で行われる「物々交換」は貨幣を使わずに物と物を直接交換する交易の形式であることは同じだが、値踏みや駆け引きは伴わない。互いの資源を評価し査定することは無く、入山に暮らす人びとは日常的に個人の資源を授受しあい、お互いに思いやりを抱きながら助け合っている。おすそわけは慣習化された贈答の機会であり、一般に「人から貰った物や利益の一部を他人に分け与えること」という意味で使用される。しかし入山および由比地区では、他人の土地で採収穫された資源は対象にはならず、個人の資源を分け与え、相手と資源を共有していることに着目しておきたい。おすそわけを受け取る際に人びとは相手に対する感謝の気持ちを持ち、お返しのおすそわけをする。本節では入山内で実際に行われている「物々交換」の様子、由比地区全体にわたるおすそわけの様子を記述していく。

3.1 入山内での「物々交換」

分配の対象となるのは、家の畑で収穫したモノであることが多い。その種類は年間を通して20~40におよび非常に多種である。レタスやキャベツといった葉物野菜は日持ちしないため、収穫後、すぐにおすそわけする。また、赤飯、こんにゃく、そば、果物から作ったジャムやキャラブキをはじめとする山菜の煮物といった加工品もおすそわけする。ただ、ジャガイモ、ダイコン、タマネギといった入山に暮らしているほとんどの家庭で育てているモノはおすそわけの対象になりにくい。また、猟友会によって屠殺・血抜きされた獣害対策で駆除された動物も分配の対象となり家庭で食されている。戦後食料難の時代は獣も重要な食糧であったが現在食べられているものはイノシシ肉が代表的である。猟友会 2~3 人で狩猟し血抜きを行った後、狩猟した仲間内で分配し、薄く切られた状態や大きな塊の状態の肉が各家庭におすそわけされる。イノシシ肉はイノシシ汁や焼肉、すき焼き風に味付けした獅子鍋、酒、みりん、醤油、シウガ等で煮るなどして調理する。

このように、入山では多種の作物や獣を採収穫することができ、自家消費するだけでなく「物々交換」の対象ともなっているが、すべてのモノが対象になるわけではない。入山内における「物々交換」の対象となる条件の一つに、相手の家庭で育てていないモノ、所有していないモノであることがあげられる。しかし、住民たちの交流の場が無くなってしまった入山では、どのようにして他人の家庭の山菜や畑の収穫状況を把握しているのだろうか。現在入山には商店や飲食店が残っておらず、入山で暮らす人びとが集まる場所は無くなってしまった。かつて

酒を飲み交わしたり雑談をしたりする交流の場であった丸福商店（通称「ふくちゃん」）も 2 年前に閉店した。また、入山に暮らす人びとは日中海側の地区や富士宮市に働きに出ている人が多いため、生活リズムや生活範囲が各家庭で異なり、集う機会も少ない。そのため、道端で偶然会ったり散歩したりしているときに会うことが重要な情報交換の機会となる。その際、人びとは最近の農作物の状況や調理方法について意見交換し、おすそわけの対象を選別する。また、おすそわけをもらったお返しには、相手からもらったモノとは異なるモノを渡す。このように、互いに不足しているものを補うことで食生活が充足する。英君酒造では年末年始や新製品が出たとき、スギダマが新しいものになるときに、いつもおすそわけを貰っている人にまとめて一升瓶や四合瓶をお返しする。また、食料に限らず、相手にとって不足しているものがあれば助け合う地域性が入山にはある。例をあげれば、墓に供える香花やお彼岸に供えるヒガンバナといった生活資源もおすそわけの対象となる。

「物々交換」の対象となる条件のもう一つは、自分自身がおいしいと自信を持っているモノであることだ。自家消費しきれず余ったものを無作為におすそわけしているのではなく、相手とおいしさを共有するためにおすそわけの対象を選別している。旬の食材や上手く育てられた作物、美味しく調理できたものを渡すことは、相手に対して名声を誇示する意味があるのではなく、おいしさを共有することに大きな意味がある。

ここで実際に行われていたおすそわけについて記述する。英君酒造の望月裕祐氏に聞き取り調査をしている際、鍵穴地区に住んでいる英君酒造従業員の兄弟がツタンカーメンをおすそわけに来た。豆ごはんの作り方をアドバイスし、2 合分の豆をビニール袋に入れて渡していた（写真 2）。また、おすそわけをする際にはただモノを渡すだけではなく、調理法をアドバイスしたり美味しさを伝えたりすることで、モノの単なる授受以上のやり取りがなされていた。入山に暮らす鈴木政光氏・洋江氏に聞き取り調査をしている際に、洋江氏の親戚が遊びに来ていた。そこではニンニク、タマネギ、ホウレンソウ、キュウリをおすそわけしていた。その場で新鮮な野菜を収穫し渡しており、なかでもキュウリはいぼが鋭く新鮮な証拠が残っていた。遊びに来ていた夫婦はたくさん野菜を貰って喜んでおり、おすそわけをした政光氏・洋江氏自身も喜んでいる姿を見て嬉しそうだった。

入山で暮らす人びとがおすそわけをする理由は、「あげることが好きだから」「喜んでもらえる嬉しいから」「喜ぶ顔が見たいから」といったものである。おすそわけを渡す対象となるのは近所に住む人びと、親戚や息子・娘、役員と一緒にやって仲良くなった友達が主である。前述のように現在の入山には集まる場所や機会はなかなかない。だからこそ、おすそわけという行為が人びとをつなぐ一つの習慣になっているのである。

基本的に入山内では「山の恵み」の「物々交換」が行われているが、農業とサクラエビ漁で生計を立てる半農半漁に携わる人が、サクラエビ漁の後にサクラエビをおすそわけに来ることもある。このように入山内でも由比地区全体の資源が交換されている。次節では入山で採れる「自然の恵み」と由比の海側で獲れる「海の恵み」の交換について記述する。また、歴史的におすそわけが行われてきたことで生まれた由比地区の地域性についても記述する。



写真2 おすそわけされたツタンカーメン (介川撮影)

3.2 由比地区に渡るおすそわけ

ゆい女性の会の会長を務める豊島智江氏は「おすそわけは由比の地域性である」という。昔から土産物を10～20個買ってきて近所に配布するのが近所付き合いの基本であり、気持ちをモノに添えて渡す文化が由比にはある。交友範囲には個人差があるが、たとえ距離があったとしても車を使用し互いの家を訪問しあい、食材や土産物といった個人の資源を授受しあう。基本におすそわけを貰ったら、お返しに渡すものをすぐに選別するため、多くの場合「物々交換」は短い期間で成立する。「何か貰ったらすぐに何か返す」という意識があるため、例年貰うものがある場合はその時期になると事前にお返しを用意しておく家庭もある。渡す対象となるのは、近所に住む人びと、親戚や息子・娘、友達である。おすそわけをする際には食材の良さや調理方法を伝えるだけでなく、最近の様子や体の調子を報告するなど世間話をするという。

入山をはじめとする山側の地区からは山菜や畑で採れた野菜など「自然の恵み」が与えられる一方で、海側の地区からはサクラエビ、シラス、イサキ、タイといった生魚や乾燥したイワシやサバから削り取った出汁粉などの「海の恵み」が与えられる。つまり、由比地区内で由比の山で採れた「自然の恵み」と由比の海で捕れた「海の恵み」が交換され、由比地区内で資源が循環している。サクラエビは生サクラエビやかき揚げや釜揚げ、シラスは生シラスやみそ汁や天ぷら、イサキやタイは刺身、焼魚、煮魚といった方法で食べる。ただ現在は、海で捕れたモノに限らず、旅行のお土産や手作りケーキをおすそわけすることもある。

入山に暮らす笹間明恵氏は「由比に暮らす人びとはあげることも貰うことも好き」という。かつて由比には「近所づきあいをしなければならぬ」という意識があり、人間関係を円滑に進めるために外部の目を気にしている側面もあった。しかし、現在おすそわけは昔ほど義務感を持つ行為ではなくなり、それぞれの形で自由におすそわけを楽しんでいる。

4 考察

ここまで入山内で実際に行われている「物々交換」、由比地区全体にわたるおすそわけについて記述してきた。なぜ入山に暮らす人びとが自分たちの家庭で採取獲しモノを直売所や青果店等に販売せず、近隣住民や親戚、友達に「分配」するかといえば、人びとは資源を経済的に利用しているのではなく、山や畑を家庭で消費する資源を生産したり所有している土地を管理したりするために利用しているからだ。彼らにとって「分配」はお互いを助け合うためにしている行為であり、その背景には入山に商店や飲食店が無くお互いに助け合わなければいけない環境であることや商品として売出すことが簡単でないことがある。一般に誰もが平等に利用

できる共有の資源とされる山菜も、入山においては山が個人の私有地として管理されることで、山菜が個人の資源として「分配」の対象となっている。

丹野正（2009）や今村薫（2011）は狩猟採集民社会における食物分配に着目し、「彼らの食物分配は当事者が場と活動、すなわち生活全般を共有していることに起因し、社会の核として存在し、機能している」と述べる。入山に暮らす人びとにとっても食物分配は特別な行為ではなく日常的な行為であり、資源を共有して日々生活を送っている。入山に暮らす人びとにとって日常的な行為である食物のやりとりは、「贈与論」にてモースが提示した「贈る義務・受け取る義務・返す義務」からなる贈与交換を無意識的に踏襲している。人びとが実践する「物々交換」は、義務や建前で成立しているのではなく水平的な関係をもとに入山を含む山側の地区と海側の地区の間で行われる。その際には、同時に、コミュニケーションの手段や感謝を表す行為として言葉の交換も行われ、集団社会の形成のために機能している。個人の気持ちを添えた「分配」が相互に行われることで、入山・由比地区というコミュニティは成立し、維持されている。

丸山は寺嶋秀明（2011）の指摘も踏まえ、以下のように述べる。

分配が自らを生かしてきた「共同性や絆」に対する「返礼」であるとするならば、ある個人が分配という行為を繰り返し実践し続けることは、「与え」「受ける」ことを続けることによって、その「共同性や絆」を保ち続けようとする行為として理解できる。彼らにあるのは、そのようにして「共同性」のなかで生きていく「義務」だともいえる（丸山 2016:207）。

入山に暮らす人びとは全員が顔と名前を認識しており、それぞれに交流がある。小さなコミュニティであるからこそ1人1人が地区で果たす役割は大きい。入山では全国的に深刻な課題となっている少子高齢化という現状があるなかで、地域全体が協力して祭りを盛り上げたり子どもや高齢者をサポートしたりする動きがあり、これは住民たちの協力なくしては達成できない事柄である。現代の風潮に合わせて催しの内容が変化したり諸課題を解決したりするための新しい取り組みが行われる一方で、大きく形を変えずに日常的に行われ続けているのがおすそわけ＝「分配」である。私はおすそわけが入山に暮らす人びとの社会関係および共同性を構築するにあたって重要な役割を果たしていることを強調したい。ただ単にモノを渡すだけでなく、そのときに食材の調理法を教えたり近況報告をしたりすることからわかるように、おすそわけをすることは一種のコミュニケーションである。丸山は「分配」の実践からのコミュニティ形成について意見し、以下のように述べる。

分配は、「ひとつところに暮らす人びと」という枠を想定し、その枠内の「全員」に対して行われるのではなく、ある個人と別の個人の一対一の具体的な関係性のなかで実践されている。そしてそれが繰り返され、関係性が網の目のようにはりめぐらされていくなかで、その重なるの濃いところとして、結果的に「ひとつところに住む人びと」という輪郭が浮かび上がってくるのである。（丸山 2016:195）

また、入山を含む山側の地区と海側の地区の「物々交換」は、一対一の個人的な関係性のなかで実践されている。必ずしも全員が関係を持っているわけではなく、交換の対象である人びとと資源の授受を行っている。丸山は、「具体的な関係性が更新し続けられる限り、分配は続いていく」（丸山 2016:207）と述べる。分配の実践・継続は、関係性を維持したいという意味表

示でもあり、分配の継続の理由はさまざまだろう。ただ入山に暮らす人びとの「分配」は、自己の利益のためではなく相手の利益のための行為であり、「分配」という行為の実践に際して「寛容さという価値観」（サービス 1972）を持って行っている。このように個人間で互いを思いやりながら「物々交換」を繰り返すことで、由比地区の山資源と海資源は総体的に循環し、同時に山に暮らす人びとと海に暮らす人びとを結びつけている。山にも海にも資源が豊富にある由比だからこそ、おすそわけは人びとの生活に潤いを与える重要な行為である。それは資源の充足という意味だけでなく、おすそわけという行為を介してコミュニケーションをとる機会を得る意味を持ち、人間関係を構築していくうえで大きな役割を果たしている。おすそわけを通して由比を見ることで、由比という一つの地域社会に共存している住民の姿を見つけ出すことができる。

5. おわりに

現在全国的に核家族の増加や町内会・自治会への参加に対する消極的な姿勢などを背景に、地域社会における人間関係の希薄化は経年的に進展してきている。住民の個人化・孤独化が社会的課題としてあるなかで、モノを介したコミュニケーションが地域社会の形成や維持に不可欠であることを今回の調査を通して再認識した。少子高齢化が進むなかでトップダウン式に解決策・改善案を打ち、地域を変えていくことも必要ではあるが、地域に残る慣習の重要性も見逃してはならない。地域をつなぐモノや施策は必ずしも一般化やマニュアル化することはできず、それぞれに地域性を含んでいると考える。入山においてはおすそわけおよび「物々交換」が地域をつないでいたが、昨年度の調査地である静岡県掛川市横須賀では祭りを中心に人びとがつながりを持っていた。ほかの地域ではその地域をつなぐ「何か」があって、人びとはその「何か」に対して思いを抱いている。たしかに昔と変わってしまった現状を不満に思う人もいれば、今の在り様に賛同する人もいて、地域の考えは完全に一致するわけではない。ただ、そこに暮らす人びとにとって「文化」や「伝統」は、当たり前のように日常的に行っている生活行為である。その地域にある「文化」や「伝統」は、人びとがひとつの場所に共存していることを外部に示したり内部にいる地域住民に意識づけたりしている。

入山に暮らす人びとは皆温かみのある人たちで、私たちにもたくさんの「おすそわけ」をしてくれた。私たちができるお返しは今回の調査を入山に還元することを通して分配の輪に入っていくことだと考える。自分が住む地域をつないでいるモノを今一度振り返り、その背景や仕組みを見つめなおすことは、地域創成・地域開発に役立つとともに、自分の地域に対する思いを再確認する機会にもなるのではないだろうか。

参考文献

池谷和信

1999 「山菜」『日本民俗大辞典（上）』吉川弘文館、724。

今村薫

2009 「シェアリング（分かち合う）」日本文化人類学会編『文化人類学辞典』丸善株式会社、518-519。

岸上伸啓

2016 「贈与論」——人類社会における贈与、分配、再分配、交換」岸上伸啓編『贈与論再考』臨川書店、10-39。

丹野正

1991 「『分かち合い』としての『分配』」田中二郎・掛谷誠編『人の自然史』平凡社、35-55。

丸山淳子

2016 「誰と分かち合うのか——サンの食物分配にみられる変化と連続性」岸上伸啓編『贈与論再考』臨川書店、161-183。

JA しみず 株式会社 JA しみず

2017 『食の安全研究会資料』。

総務省

2010 「平成 22 年度 情報通信白書」(2017 年 7 月 18 日取得、
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h22/html/md121200.html>)。